

神経幹神経節から起始し、大動脈分岐部下端を上
行しながら下腸間膜神経節より1cmの神経叢に合
流する第6腰内蔵神経が存在するのがカニクイザ
ル、ヒヒとも観察された。この神経は昨年、テナ
ガザルで確認された第1仙骨交感神経幹神経節か
ら起こり、下腹神経に合流する第1仙骨内蔵神経
ならびに、一昨年、チンパンジーで確認された第
5交感神経幹神経節・第1仙骨交感神経幹神経節
から起こる腰仙骨内蔵神経と類似の神経と考えら
れ、交感神経幹から骨盤神経叢に至る上・下の2
経路(①腰内蔵神経→下腹神経→骨盤神経叢、②
仙骨内蔵神経→骨盤神経叢)の中間的立場を占め
る経路であると考えられ、その到達経路は大動脈
分岐部の下方で、その到達部位は犬では下腸間膜
神経節、ヒヒ、カニクイザルではその下方の神経
叢、チンパンジーでは下腹神経と次第に下方に移
動する現象が観察された。

2) 下腸間膜神経節からの上下腹神経叢の明瞭
な分離は観察されなかったが、犬のような単純な
単一の神経節とは異なり、神経叢の分離傾向が認
められ、下腸間膜神経節の下方約1cmの範囲で神
経叢が形成されていた。昨年のテナガザルでは下
腸間膜動脈神経節と上下腹神経叢の分離が観察さ
れていることから、高等霊長類になるにつれて両
神経叢の分離は一層明瞭になるのが示唆された。

計画9-8

霊長類動物系の比較解剖学的研究

松本 真・吉井 到・池田 章
(川崎医大・第1解剖)

動脈系はからだのいろいろな器官のなかでもと
くに大きな変異をしめす。われわれは立体造管法
を中心にした霊長類各分類群の動脈系の解析によっ
て、比較解剖学的な変異を明らかにするとともに、
その進化史上の変化と意義を考究する目的で研究
を行っている。

今年度は新規に冷凍・液浸標本を借用すること
はできなかったが、骨格標本によって上腕部動脈
系に密接に関連した骨形態を観察した。

すなわち、霊長類における上腕骨の上顆内孔は、
原猿類で常在、狭鼻類で欠如し、広鼻類では分類
群間変異があることが知られている。他の哺乳類
でも見られることから、孔の存在は原始的な形質
と考えられ、ふつうは正中神経と上腕動脈を通し

ている。この上腕動脈の形態の研究の関連として、
同孔の変異をあらためて調査したのである。

観察したうちでは、すべての原猿類に同孔が確
認され、狭鼻類にはまったく認められなかった。
広鼻類では、タマリン属、ゲルディモンキー属、
オマキザル属、リスザル属、サキ属、ウアカリ属、
ヒゲサキ属、ウーリーモンキー属に同孔は観察さ
れ、マーモセット属、ピグミーマーモセット属、
ライオンタマリン属、ティティ属、ホエザル属、
クモザル属には認められなかった。このように、
広鼻類のなかではモザイク的に変異が認められる
し、タマリン属やマーモセット属のなかには同孔
の発達程度に個体変異もよく観察された。また、
興味深いことにヨザルにおいては、はっきりと同
孔の存在するものとまったく認められないものの
2タイプがあった。

本研究ではひきつづき、同孔に関係する局所解
剖学的な特徴と、分類群間変異の意味について検
討していく考えである。

計画9-9

マントヒヒの肺の気管支分岐、肺葉区分および 肺動脈分布

中久喜正一(東京農工大学)
江原昭善(椋山女学院大学)

ホルマリン固定のマントヒヒ2例の肺の気管支
系および肺動脈系にcelluloidのacetone溶液を注
入して鋳型標本を作り、気管支分岐と肺動脈分布
について調べた。左右の気管支からは何本もの葉
気管支および区域気管支が起こる。それらは起点
から背側、外側、腹側および内側の4気管支系に
大別できる。さらに気管最下部の外側から1本の
気管支が分枝する。すなわち気管気管支である。
これらの気管支を「哺乳類の肺の気管支分岐の基
本型」(中久喜、1975)に基づいて分類すると気
管から起こる気管支は外側気管支系の第1枝に相
当し、右上葉を形成する。他の1例ではこの気管
支は気管分岐部の右外側から起こる。霊長類の多
くの肺ではこの気管支は右気管支から起こる。マ
ントヒヒで右上葉気管支の起点が他の霊長類と異
なるのはマントヒヒでは気管支分岐部が他の霊長
類より下方であるためと思われる。右中葉は外側
気管支系の第1枝で、右副葉は腹側気管支系の第
1枝で形成され、残りの4気管支系の気管支が右